

イギリス人とイギリスの庭園 (I)

伊 東 好次郎*

The English People and English Gardens (I)

Kojiro ITO

Abstract

As the English people were relieved from the threat of war, the castles lost their importance as the central position of military and administration in the late fourteenth century. The English overlords left their castles and moved into their new residences built in their manors. The residences were called the manor houses which the lords lived in. The lords who were lower than them in social rank and the wealthy merchants who profited by the wool trade built their country houses following the example of the overlords. The country houses increased in number together with the manor houses, because these houses were regarded as the symbol of their owners' social status.

The English gardens developed in parallel with the country houses. In the garden gorgeous events were held for the entertainment of the royal family as well as the lords and the ladies of the noble families. However, not a few lords were troubled with melancholy in the court of Queen Elizabeth I. Melancholy was peculiar to the Elizabethan age, so that it was called the "Elizabethan malady." There were lords and ladies who wanted to be free from the troubles in this life. They meditated and sought the solace of mind in communion with God in the recesses of their gardens. They found their example in the piety of the medieval hermits. The gardens were good for those who hoped to be relieved from mental anxiety and tried to find the true meaning of living. This view was held by the English elite and became traditional in English society in the course of time. How the English people were closely related to their gardens is objectively illustrated and discussed in this study.

Key Words: garden, wilderness, country house, hermit, meditation

* 元教授 英文学

I イタリアのルネッサンス庭園

イタリアでは、ルネッサンスの時代に、ルネッサンス庭園（The Renaissance Garden）と呼ばれる設計の庭園が発達した。ルネッサンス庭園設計の基礎となったのは、レオネ・バティスタ・アールベルティ（Leone Battista Alberti）の庭園に関する理論だった、と伝えられている。アールベルティは、絵画、詩、哲学、音楽、建築の各分野に優れた才能を備えていた、イタリア・ルネッサンス天才中の一人だった。彼の理論を取り入れて作られた庭園は多いが、特に有名なのはヴィラ・メディチ（Villa Medici）とヴィラ・デステイ（Villa Deste）の庭園である¹⁾。

イタリアのルネッサンス庭園の特徴は、丘や小山の斜面を利用して、庭園が作られていることである。斜面の下の平坦な部分には、神話の神々、古代ローマの偉人、賢者、哲学者、文学者たちの彫像が配列されていることが多い。斜面の上から流れ落ちる水を引いて作られた泉水の中央の噴水から、キラキラ光り輝きながら、水が絶えず吹き上げては落下している。庭園は外からの侵入者を防ぐため、まわりを高い塀で囲まれていた。

斜面を上がって行くと、眺めが開け、澄んだ空気は爽やかに、日光は明るく感じられる。立止まって見ると、眼下の都や町、村、広々とした平原や海、青空の下にどこか見覚えのある遠くの丘や山々の嶺が見渡せる眺めは素晴らしい。庭園はこのように、四方の景観を楽しめるように作られていた。

丘や小山の斜面の下の方には、崖を横に深く掘りこんで、岩屋（grottoes）や洞窟（caverns）が作られていた。岩屋や洞窟の内側の岩の壁面に、蠟の塗料を塗りつけて緑色にして、苔が生えている感じを出した。また、ローマ時代にしたように壁面に絵を描いて飾りにすることもあった。斜面の上から流れて来る水を利用して、岩屋や洞窟の近くに人工の滝が作られていた。こうすることによって、涼しそうな感じが出て斜面の景観の変化が楽しくなった。イタリアの夏の日光は強くて暑い。特にこうした夏の季節に、岩屋や洞窟の中に入って庭園を中から眺めっていると、時の経過も夏の暑さも忘れられて気持ちよかった²⁾。この趣向は後にフランスやイギリスの庭園に取り入れられて大流行した。

ルネッサンス庭園は、これだけでは充分でなかった。それは斜面の頂上に、立派な大邸宅を作り、別荘のまわりに広びろとした庭園を作ることだった。ヴィラ（Villa）とは、こうしたもののすべてを含むものだった。

アールベルティが示した庭園の設計は、大まかに言って、こんなものだった。特に彼はヴィラの効果を考へて、次のように勧めている。頂上にあるヴィラをを目指して、斜面の道をただ上がって行くだけではつまらない。これまでに述べたように、丘の斜面を利用して作られた下の

庭園から見る眺めは素晴らしい。しかし、眺めは見る場所や角度によって違っている。眺望全体を一つにまとめあげることは出来ない。これを実現出来るのは、丘の頂上にあるヴィラからの眺めだけだ。

下の庭園から見て、いかに素晴らしい眺めでも、そればかり見ていると変わった眺めを見なくなる。場所を移して思いがけない素晴らしい風景が目飛び込んで来ると、心はハッとした驚ろきに打たれてときめく。だからヴィラの設計には、風景の変化のない単調さを避けて、意外性を起こさせる工夫をこらすことが大切だ。これがヴィラから風景を眺める時、効果を生み出す最も大切な条件になる。頂上を目指して行く人が、誰でもゆっくりと、じっくりと斜面の道を上がってゆけるように、ヴィラは丘の高みに作るがよい。楽に上がれるとともに、斜面を上がって行く人に、途中であそこにあると殆んど気付かれぬように、ヴィラを作るようにすることだ。そうすれば、ヴィラに辿り着いた瞬間に、途中見えなかった素晴らしい風景がすべて、パッと一度に眼に飛び込んで来るからだ³⁾。

Ⅱ フランスの人工庭園

中世以来フランスは、ヨーロッパ文化を取り入れて、大陸諸国に君臨していた。フランスの庭園は、イタリアのルネッサンス庭園の影響を受けて発達した。しかし、フランスの全盛期になった太陽王ルイ十四世（Louis XIV le Roi-Soleil）の時代に、庭園設計の天才ラ・ヌートル（Le Nôtre André）により、フランス独自の庭園設計理論が作られ、フランスの人工庭園（formal garden）はヨーロッパの庭園中、最高水準に到達した⁴⁾。

ラ・ヌートルは祖父の代から三代にわたり、王家のお抱え庭師を勤めていた造園専門家だった。彼はフランス国内の大きな城、宮殿、寺院などにある名園を新たに作ったり、作り変えたりした。中でも彼が大規模に作り変えたヴェルサイユ宮殿（The Palace of Versailles）の庭園は、ヨーロッパの庭園の最高傑作として、今なお世界的な高い評価を受けている。

ヴェルサイユ庭園の特徴は、庭園全体が幾何学的左右対称に構成されていることである。宮殿からの眺望は、目の届く限り切れ目なく続く深い奥行をとって、壮大なスケールで延び広がっている。ラ・ヌートルが彼独自の造園理念と、当時の造園技術の粋を結集して完成したヴェルサイユの庭園は、十八世紀のイギリスで、豊かな自然を取り入れて、造園の天才たちが風景庭園（landscape garden）を完成させるまで、ヨーロッパのあらゆる庭園の中の、最高の名園とみなされていた。

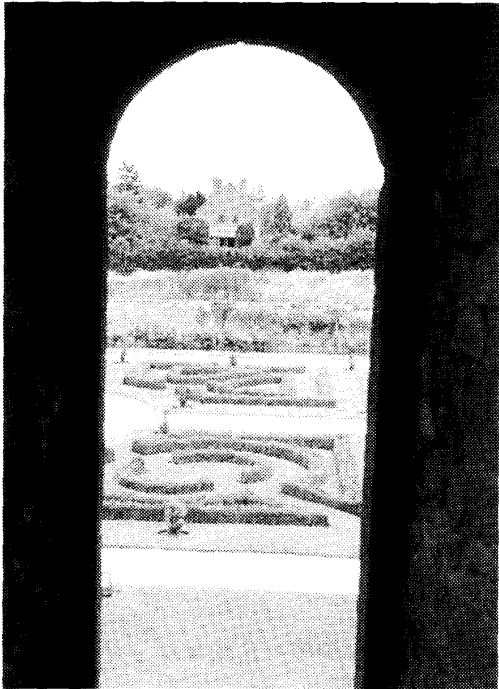
ヨーロッパでは、庭園は華麗な娯楽行事が催される、社交の場として使われることが多かつ

た。イギリスでも、庭園は大陸諸国と同様に、社交的な場として使われていたが、貴族の中では、庭園を神との交わりの場として、庭園内で宗教的冥想に耽る貴族もいた。しかし、神との交わりが専ら教会の中で行われていたカトリック教国のイタリアやフランスをはじめとしてヨーロッパ諸国では、庭園内で宗教的冥想に耽る習慣はなかった⁵⁾。

庭園を王侯貴族たちの社交の場にして、ヨーロッパで最も華麗な催しが行われたのは、ヴェルサイユ宮殿の庭園だった。1664年8月、ルイ十四世がヴェルサイユ庭園で開いた園遊会は、大変有名なものだった。一連の華麗なスペクタクル、パレード、馬上騎士槍試合大会 (tournament)、舞踊劇バレエ、音楽会、モリエールの喜劇上演などの催しが、5日間昼夜にわたって華やかに繰り広げられた。これは、まさに歴史に残る豪華な催しだった、と伝えられている⁶⁾。

Ⅲ イギリス貴族と隠者

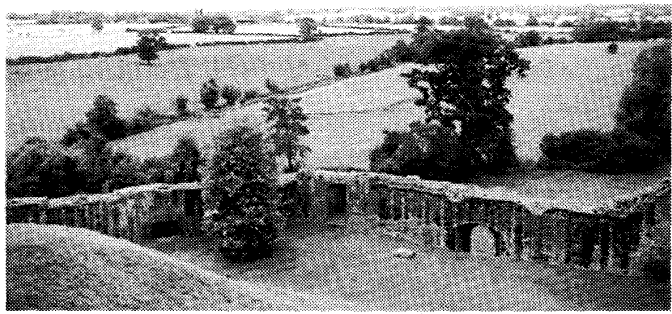
イギリスでは、チューダー (Tudor) 王朝の時代になると、イタリア式庭園やヴェルサイユの庭園を模した人工庭園が、相次いで作られるようになった。テムズ河中流の河畔に作られた Hampton Court Palace には、イタリアのルネッサンス庭園やヴェルサイユの庭園の様式を随所に取り入れた、大規模な庭園が作られた⁷⁾。



2. Kenilworth Castle (’93年8月8日筆者撮影)。

A. 城壁の窓越しに見える庭園 (左)。

B. 城の外構えの城壁と周辺の展望 (右下)。



王室や上流大貴族の庭園では、さまざまな社交の宴会や催しが豪華に行われた。中でも有名だったのは、レスター伯ロバート・ダドリー (Robert Dudley, Earl of Leicester) が、エリザベス女王のために、1575年7月にケニルワス城 (Kenilworth Castle, Warwickshire) で開いた大歓迎会だった。レスター伯は女王からケニルワス城を1563年に与えられた。彼は城の外側に大きく立派な庭園を作った。この庭園はエリザベス時代の平和の中から生まれた、最初の大庭園だったと言われている⁸⁾。女王はケニルワス城を、1565年に最初訪れている。

エリザベス一世は、随一の寵臣だったケニルワス城主レスター伯を再び訪れた。時は1575年7月だった。女王滞在中、レスター伯はあらん限りの贅を尽くして、18日間昼夜にわたって、城内と庭園で、女王のため盛大豪華極まりない歓迎の祝宴を開いた。このため、レスター伯が使った金は、当時の金額で1日1千ポンド、18日間合計で1万8千ポンドだった。これは当時のイギリス国家の一年間の総収入を上廻る金額だった。余りにも巨額な費用だったので、人びとは驚いて、大評判になったそうである⁹⁾。この豪華極まりない歓迎の催しは、後にスコットの歴史小説『ケニルワス』 (Walter Scott, *Kenilworth*) の中で、想像豊かに描かれている。

エリザベス時代に急速に発展した華やかで、活力に満ちた、明るい面がここに表れているのに対し、貴族の中には権謀術数が渦巻く宮廷の生活を、その儘受け入れない人びとがいた。彼らは立身栄達の世界に背を向けて、中世の隠者に倣って、自分の庭園の奥まった所で冥想に耽

り、世捨て人になろうとした。トマス・ブッシュェル (Thomas Bushell) やヘンリー・ヘリフォード (Henry Hereford) のように、庭園深く引きこもり、神を求めてひたすら冥想に耽って時を過ごした者がそのよい例である。また自分の庭園に、深い広い横穴を掘って、これをイタリアのルネッサンス庭園にある岩屋 (grottoes) のように仕上げ、その中にこもって隠者のような生き方をした者がいた。彼らにとって、庭園は娯楽や野外宴会の場ではなく、自然を通して神と交わることが出来る、宗教的な意味を持っている場だったのである¹⁰⁾。

イギリス貴族が隠者の生活に心を惹かれていたせい、エリザベス時代を彩った華やかなページェントの列に、華麗な服装をした参加者に混じって、隠者に紛した貴族が登場することがあった。たとえば、1477年、ヨーク公爵 (Duke of York) の結婚式に挙行された祝賀の馬上騎士試合大会のパレードに、ドウセット侯爵 (Marquis of Dorset) は隠者姿で、隠者の庵の形に仕立てた馬車に乗って参加した。彼は自分の名がその名を取って名づけられた隠者、聖アントニオ (Saint Anthony, Hermit) にあやかって、隠者の服装をしたのだった。しかし、彼の真意は、それだけではなかった。隠者の服装は、この日を最後に公職を退き、世捨て人になろうとする、彼の決意の表明だったのである¹¹⁾。

まだ他にも、隠者姿をした貴族の例がある。エリザベス女王に仕えていた高官の1人に、サー・ウィリアム・セシル (Sir William Cecil) という貴族がいた。彼はイングランド南東部ハ

ートフォードシャー州 (Herts) に、大邸宅バーリー館を構えていた。彼は女王の信任を受け、1571年にロード・バーリー (Lord Burghley) の称号を授けられた。彼には優秀な二人の息子がいた。次男ロバートに将来邸宅の必要が生じることを考えて、彼はエセックシャー州ティブルズ (Theobalds, Essexshire) の領地を購入していた。バーリー卿は伝記作家のジョン・オーブリー (John Aubrey) が書いているように、無類の庭園愛好家だったので、ティブルズの邸宅に立

派な庭園を作って楽しんでた。

ティブルズの近くに、王室の館が幾つもあったので、女王は館のどれかに来ると、お気に入りのバーリー卿を訪ねて、ティブルズの邸宅に滞在されることがよくあった。バーリー卿はティブルズの邸宅を、女王のために、全面的に改造した。そのため彼のティブルズの邸は、女王のカントリー・ハウスのように、当時思われていた¹²⁾。

バーリー卿は、エリザベス女王に引き立てられて、王室会計局長官 (Treasurer of the Household) に出世した。しかし、よい事ばかり続かなかった。しばらくするうちに、彼は妻と娘を相次いで亡くす不幸に見舞われた。彼が宮廷に姿を現さなくなったので、女王は彼の様子を見にティブルズを訪れた。その時、バーリー卿の次男ロバート (Robert Cecil) は隠者姿で父に代って女王を迎えた。その訳は、彼の父が最近2年間のうちに、最愛の妻と娘を亡くしたことを悲しみ、失意のうちに世間から隠退して、既に世捨て人の生活に入っていたからである。彼はロバート・グリーン (Robert Greene) の詩に托して、女王に事情を伝えて父の非礼を詫び、女王の許しを乞うた。女王はバーリー卿に宮廷に復帰して、以前にまさる重要な要職に就いて、忠勤に励んでもらいたいと思って訪れたのだったが、事情を知ると断念せざるを得なかった。

以上の例に見るように、隠者姿の扮装は表面的には相手をもてなす意味で用いられたが、その裏には、これまで続けて来た公けの活動の生活から隠退して、世捨て人となる、個人的な決意、あるいは家庭の事情を間接的に伝えよう、とする意図をもって使われることがあった¹³⁾。

チューダー王朝期に、エリザベス一世の父ヘンリー八世 (Henry VIII) は、ローマ・カトリック教会から分離してイギリス国教会を設立した。イギリス国民はこうした宗教上の大事件を経験したけれど、中世以来続いて来た彼らのキリスト教信仰は変わらなかった。庭園で孤独の冥

想に耽っていたイギリス貴族の意識には、世俗を遠く離れた自然の中で神との交わりを求めて、一人冥想に耽り日夜精進潔斎を続けていた中世の修道士や、隠者への思いが存在していたことだろう。中世の隠者に倣って、冥想に耽り神と交わるのに、庭園はなぜ彼らにとって適わしい場だったのだろうか。その理由を探るため、チューダー時代の社会に目を向けてみよう。

エリザベス時代に、イギリス社会は飛躍的に発展し、活力があり、繁栄の道を辿り続けた。しかし、シェークスピアの『ハムレット』に描かれているような、病根に深く冒された社会が、活力と繁栄に満ちた社会の陰に潜んでいた。宮廷で女王に仕えていた貴族たちだって、いつ陰謀の嫌疑がわが身に降りかかり、策略の犠牲となって栄達の座から転落して、死刑台の露となる運命が襲いかかるのか、と明日が知れぬ不安に心が安らぐことがなかった。ケニルワス城主、レスター伯ダドリー卿は女王の寵臣だった。しかし、彼ほどの者だって、一たび女王の不興を蒙ると、たちまち失脚して処刑された。これは、まさに聞く者の胸を凍りつかせる、恐ろしい大事件だった。

人びとは社会が病いに冒されていることを感じていたが、病いを癒す力を欠いていた。人びとの心は、どうすることも出来ない、空しい虚脱感と陰鬱な想いに冒されていた。社会全体を覆っていた、この病的症状をエリザベス時代特有の病害（“Elizabethan Malady”）と呼ぶ人もいる。ロバート・バートンの『陰鬱の解剖学』（*The Anatomy of Melancholy* 1621 図版5参照）は、こうした時代の病弊を題材にして書かれた作品である。バートンはこの本の中で、効果的

な陰鬱症対策の一つとして、静かな庭園内を散歩することを勧めている¹⁴⁾。バートンの言葉は、病める時代に生きていた貴族の中に、庭園で冥想に耽っていた者がいたという、これまで見てきた例と関連づけてみてもよさそうである。

Ⅳ 城からカントリー・ハウスへ

これまで城主だった貴族たちは、家族や使用人を連れて、新しい領主の館（manor house）に移り住んだ。そこは、これまで長い間狩猟地として使われていた、パークと呼ばれた広大な所だった。城内の生活と比べると、領主の館の生活はすべてが快適だった。狭苦しかった城内の庭園は、領主館の周辺に作られた美しい花々や木々の緑が多い、広びろとした庭園に変わった。庭園の彼方には、羊や牛が放牧されている牧場や野原、その中を緩やかに流れている河の

ある長閑な風景、湖水、遠くに見える丘の峰々があった。窓から、この豊かな自然の田園風景を眺められることも、新しい邸宅に住む者たちの、大きな楽しみの一つだった。

しかし、内部の間取りには、まだまだ問題が多く残っていた。家族の者たちが最も困った問題は、私生活を無視した新しい邸宅の構造だった。チューダー・スチュワート時代の邸宅には、空間の無駄使いという理由で、屋内の各室に通じる廊下や、玄関の間は作られていなかった。このため、家人は用事があると、室伝いに相手の部屋に行かなければならなかった。そうかと思うと、自分の部屋に突然人が入り込んで来て驚くことがあった。そのうえ、使用人が大勢邸内で働いていたから、領主の家族は誰も、自分の部屋に一人でいても、いつ他人が入り込んで来るか判らないから、私生活の自由とプライバシーを保てなかった¹⁵⁾。この生活の不便が改善されたのは、十八世紀に入ってからのことだった。と伝えられている。この事情を知るため、イギリス貴族の邸宅が、中世の城からカントリー・ハウスに変わった経緯を、これからしばらく辿ってみよう。

※ ※ ※ ※

チューダー王朝からスチュアート王朝 (Stewart) 時代の庭園は、領主の館 (manor house) や貴族の大邸宅 (country house) の周辺に作られていた。庭園は大まかに言って、次のように設計されていた。まず庭園の広い芝生の敷地は、その中を伸びている散策路によって、幾つもの区画に分かれていた。区画された各部分には、花園、バラ園、野菜園、果実園などが作られていて、中央に噴水がきらめく泉水や池があった。家族の者たちが招待した人たちを案内して庭園内を散策する途中、立ち寄って休息し軽い食事や飲物を取るために利用する四阿が、所どころに設けられていた。また庭園内で娯楽を楽しむため、舞踊、音楽、演劇その他の催しを行なう、簡単な野外ステージの設備も作られていた。これが当時のイタリアやフランスの人工庭園の様式を取り入れて作られたイギリスのガーデン (garden) だった。

チューダー王朝以前の十一世紀後半にイギリスの支配者となったノルマン王朝から十四世紀の終りまで、中世の時代のイギリスの生活の中心は城だった。城の周辺一帯の広い領地の大半は、食料衣服の自給自足のためのお狩り場になっていた。この中の木が密生している繁みや林の中に、野性の鹿や飼育された鹿をはじめ、食料にされるいろいろな種類の野性動物や鳥類が生息していた。また兎や豚、鶏などが家畜として飼育場で飼育されていた。お狩り場の中に作られていた畑や牧場は、穀物と乳製品の貴重な供給源になっていた。これらすべてを含んでいたお狩り場は¹⁶⁾、中世の時代に「パーク」(park) と呼ばれていた。城内に作られていた庭園は四角形か長方形になっており、中央にある噴水から流れ出る水が美しい流れとなって土をうるおして、花々や果実が育てられていた。庭園の周囲は石の塀や、木の蔓の垣根で囲まれてい

たので、城内の庭園は「囲い込み四角形庭園」(The square, enclosed garden 図版7参照)と呼ばれていた。ここはまた、中世のロマンスに描かれている若い姫君、王子、騎士などの、秘められた恋の花園だった¹⁷⁾。

十四世紀後半になって、戦争の恐怖が終わると、これまでイギリスの生活の中心になっていた城は、必要がなくなった。城構えの宮殿 (Castle Palace) になっていたドウヴァー城 (Dover Castle)、ロンドン塔 (Tower of London)、ウインザー城 (Windsor Castle) は別として、大部分の城主と家族たちは、居心地の悪い城を出て、パーク内に作った大邸宅に移り住んだ。彼らの邸宅は最初のうちは領主の館 (manor house) と呼ばれていたが、いつしか、カントリー・ハウスと呼ばれるようになった¹⁸⁾。

国内の治安が不安定な時代に築かれた城は、まず第一に戦乱に備えることが重要だったので、敵の侵入を防ぐため出入りが厳重になっていた。城内から城外に出るためには、門番が警備している城門を幾つも通ってから、城の周囲に張り巡してある濠に架かっている跳ね橋を渡らなければならなかった。戦争の時はこれも致し方ないとしても、平和な時の生活に、城の出入りが不自由なことは、全く困ったことだった。

城内も防衛中心の設計で作られていたから、窓は少なくて小さい。それに通風が悪い。城内はいつも暗くて陰気だ。石壁の中の生活は夏は暑い。冷たい冬の寒さは特に辛い。狭い城内で、城主と家族は、世話役の家臣や侍女たち、下働きの下男下女、警備の家臣たちと雑居生活を続

けなくてはいけない。これでは、プライベートシーが保てない。しかし、平和な世になれば、城住まいをする必要がなくなった¹⁹⁾。

快適な生活を求めて、地方の大地主だった領主は、領内の立地条件がよい所に大邸宅を作って、城を出てそこで新しい生活を始めた。中・小貴族たちは大貴族の真似をして、自分の土地に立派な邸宅を建てた。すると、毛織物生産と海外貿易で一躍大成金になったロンドンの商人たちが、土地を買って地方の大地主になって、貴族階級の間で流行していた邸宅作りに加わった。こうして、イギリス各地に作られ、時代と生活様式の変化に応じて改善され発達した邸宅は、*カントリー・ハウス* (country house) と呼ばれるようになり、城になり代わって、ここに^{あるし}住む主たちの高い社会地位を表わすシンボルとなった²⁰⁾。

十四世紀末になって、戦乱の時代が終り、生活の中心が*カントリー・ハウス*に移ると、城の管理は家臣に委ねられるか、放置される運命となった。管理不十分な城、放置状態の城の多くは、年月が経つにつれて崩れ傷んだり、草や苔に覆われて、荒れ果てた古城となった²¹⁾。十八世紀に入ってから、中世のゴシック建造物に対する関心、いわゆる「ゴシック趣味復興 (The Gothic Revival)」が高まると、老朽化した城や寺院の廃墟の美が、考古学、建築学、哲学、文学、絵画、造園の各分野にわたる文化の広い領域で、大きな関心の対象となった。これは後で取りあげることにして、再び本題に戻ることにしたい。

V ウィルダース

*カントリー・ハウス*周辺の庭園の外側は、どうなっていたのか、まずこの問題から始めよう。このことについて、チャールズ一世に仕えていた礼拝牧師 (Chaplain to Charles I) が、『伝道書注解』 (*A Commentary upon Ecclesiastes* 1639) の中で、こう述べている。

The invention of a wilderness which often is adjoined to great gardens belonging to great houses, and by a multitude of thick bushes and trees affecting an ostentation of solitariness in the midst of worldly pleasure.²²⁾

最近考案されたウィルダース (wilderness) はしばしば、大邸宅付属の大きな庭園の隣り合わせになっている。そこは高木と低木の繁みによって、世俗的な逸楽の中で、見ただけで寂し気な風情を感じさせる。

ここに出てくるウィルダースとは、どんな所なのだろうか？この言葉は荒野とか、人出が入らない未開の原野という意味で、普通使われている。状況を考えて、これでいいのかと思って、辞書を引いてみると、「(庭園中の) 荒れるに任せた所」(研究社『英和大辞典』)、「(庭園中

の) わざと手を加えていない部分」(研究社『新英和中辞典』), 「(庭園中の) 荒れ放題の場所」(小学館『英和中辞典』), 「庭園の中の) 草木のぼうぼうと生い茂った所」(旺文社『英和中辞典』)等の説明がある。しかし、この説明は今ここで取りあげている、イギリス庭園の外側に隣り合わせになっているウィルダースには、当てはまらない。困ったことに、これを伝える適当な言葉が、日本語にないから、ここでは英語その儘にウィルダース (wilderness) という言葉を使ってゆくにする。そこでまず、ウィルダースとはどんな所なのか、当時の人びとの説明を参考にして、以下述べてみたい。

さて、庭園の外側に隣接している、高木や低木が生い繁っている所を、十七世紀時代の人びとはウィルダース (Wilderness) と呼んでいた。チチェスター大寺院主教のアンソニー・ワトソン (Anthony Watson, Bishop of Chichester) が、サリー州にあったナンサッチ旧王宮 (the former royal palace of Nonsuch, Surry) の庭園に就き、十六世紀末に書いた次の記録を見れば、「ウィルダース」がどんな所だったのか、よく理解出来ると思う。

Leaving the garden, we enter the wilderness which is, in fact, neither wild nor deserted. The land, which is naturally somewhat hilly and is plentifully watered, is set out with lofty and magnificent tree-lined walks to the south and west. At the end of the path to the south, the trees have been trimmed to form canopies. Through the heart of the wilderness there are three paths, the middle one worn and sandy and the others turfed. There are trees for shade and for fruit: almost countless young apple trees, shrubs, evergreens, ferns, vines.²³¹

庭園を去って、私たちは「ウィルダース」に入った。実際に見ると、そこは荒れてもいないし、放置されてもいない。幾分自然に丘のような地形になっていて、豊かな水でうるおっている地面には、高い堂々とした喬木が並木を作っている散策路が、南と西に延びている。南の道が終わる所で、木々は枝を刈り整えられて、頭上高く覆っている。「ウィルダース」の奥に三本の道が延びている。まん中の道は踏み固められた砂質の道、あと二本は芝生の道になっている。木陰を作り、果物を取るための、木がふんだんに植えてある。りんごの木、灌木、常緑樹、羊歯、ぶどうの蔓木など、さまざまな植物がいっぱい生い繁っていて、その数は殆んど数え切れない。

イタリアの庭園にはボスコ (bosco)、フランスの庭園にはボスクエ (bosquet) と呼ばれている森がある。イギリスのウィルダースは、こうした森を取り入れて作られたものらしい。この推測と関連するような資料がある。十五——十七世紀の時代に作られた地図は、現代の地

図のように精密なものではなかった。一定のある地域内にある貴族所有の広大な土地に作られていた大邸宅を書き込み、それぞれの大邸宅の間にある街道を示した、簡単な絵図だった²⁴⁾。ラーフ・トレスウェル (Ralph Treswell) が1580年と1587年に2回作製した、ノーサンプトンシャー州のハウルデンビー (Holdenby, Northamptonshire) の地図には、簡単なチェスボード盤 (chessboard) が、五の目型 (quincunx) 模様に、庭園のまわりに木が植えられている幾つかの部分に、雑木林 (spinney) とか、林 (grove) と記号が書き込まれている。十七世紀に「ウィルダース」²⁵⁾ という庭園用語が使われていたのに、地図に “spinnys” とか “groves” とかが記号として記入されていたことを考えると、フランスの “bosquet” がイギリスの庭園に取り入れられて、“wilderness” となった、という解釈が出て来たことは当然だったのかも知れない²⁵⁾

「ウィルダース」はフランスからの輸入という、以上の説とは別に、これは昔から庭園の一隅に作られていた迷路 (labyrinth or maze) の植込みにちなんで作られたものだ、と考える人たちがいた。ちなみに、1649年、サリー州にあったウィンブルドン王室庭園 (the royal gardens of Wimbledon, Surry) の調査後、議会に提出された調査報告書の中に、次の記述がある。

The maze to lie towards the east, and the wilderness the west; the maze consists of young trees, wood, and sprays of a good growth and height, cut out into severall meanders, circles, semicircles, windings, and intricat turnings, the walkes or intervalls where of are all grass plots; this maze, as it is now ordered, adds very much to the worth of the upper level; the wilderness (a work of a vast expence to the maker thereof) consists of many young trees, woods, and sprays of a good growth and height, cut out and formed into severall ovals, squares, and angles, very well ordered, in most of the angular points whereof, as allsoe in the center of every ovall, stands a lyme tree or elme; all the allies of this wilderness, being in number eighteene, are of gravelled earth, very well ordered and maynteyned.²⁶⁾

迷路は東向き、「ウィルダース」は西向きになっている……「ウィルダース」（これを作る人には膨大な金が要る仕事）には、若木、森の木、育ちがよくて高く伸びる小枝が繁っている。これらの木々は長円形、四角形、山形の形にそれぞれ刈り込まれている。大部分先が細く尖っている木々の手入れは、非常によく行われている。また長方形をした植込みには、その中央に、ライムかニレの木が立っている。全部で18の区画に分れている植込みの根元の砂質の土は、手入れが行き届いて、よく管理されている。

ここには迷路と、隣り合わせになっているウィルダースとの、二つの位置関係が示されている。また、ウィルダースと呼ばれているものの中には、迷路の植込みとおなじような幾つかの入口と、各ブロックの植込みが、迷路そっくりにくねった幾条もの路で結びつけられているものがある。このように迷路とウィルダースには共通点が幾つもあるから、両者を関連づけた解釈をする人びとがいたのである²⁷⁾。

いろいろウィルダースに関連することを書いたので、少し混乱してしまったかも知れない。とに角ウィルダースは庭園に隣接して、さまざまな種類の木が植込まれた森のような所、と思えばよいようである。但し、これまで辞書の説明で見た、全く手入れをしない、木や草がぼうぼうと繁っている荒地ではないことだけは確かだ。ウィルダースは手入れをしないどころか、植木職人や土工人夫たちを使って、いつも怠りなく、充分に手入れをしなくてはならないので、その維持管理に大変金がかかる仕事だった。

ところで、十七世紀後半にウォーリック伯爵夫人メアリー・リッチ (Mary Rich, Countess of Warwick) という貴婦人がいた。彼女は庭園やウィルダースの中で続けていた冥想について、絶えず日記に記録していた。夫人は富豪のコーク伯リチャード・ボイル (Richard Boyle, Earl of Cork) の娘だった。彼女には、ロンドンと、サリー州ベディントン (Beddington, Surrey) と、エセックスシャー州のリーズ・プライオリー (Leighs Priory, Essexshire) とに、3つの大邸宅があった。ウォーリック伯爵夫人は富に驕らない、敬虔なクリスチャンだった。夫人は朝6時起床、着替えを済ますとすぐ、庭園かウィルダースの中に入って2時間冥想を続けた。彼女は毎日いつも、この日課を続けていて怠ることがなかった。彼女はロンドンや地方の大邸宅に移り住んでも、この日課を変えることはなかった。

ウォーリック伯夫人の日記の中に、ウィルダースの手入れ作業に関する記述がある。日記には、夫人がサリー州リーズ・プライオリーにあった彼女の邸宅のウィルダースで冥想中、起こった小さな出来事が記載されている。この日、作業員たちが荒っぽい口調で大声で話し合っていた声が、彼女の所まで聞こえて来たので、冥想中、彼女は心の静けさを破られてしまっ

た。互いに木立越しに姿が見えない程遠く離れていたから、二人の作業員は、まさか邸の奥方がこんな淋しい所に一人でいようとは、気付かなかった。彼らは手入れを言いつけられて、ウィルダーニスの中を伸びている散策路の、砂利敷き作業をしていたのだった。また、名門出身の女流作家サックヴィルーウエスト (V. Sackville-West) によると、ウィルダーニスの手入れ作業は厳しく行れていた。彼女の家族所有のノウル庭園 (Knole, Kent) のウィルダーニス整備作業が進められた時、下生えの低い草木を焼き払うように、一人の作業員が言いつけられていたのに、彼は言いつけられたことをしなかった。そのため、彼は毎週もらう賃金から、ひどい罰金を差し引かれたそうである。以上の例にみるように、所有者の貴族の意志で、ウィルダーニスは荒れないように絶えず手入れされていた²⁸⁾。

VI ウィルダーニス—冥想の場

十六、七世紀のイギリス貴族や文化人の間では、庭園は色彩と芳香で人びとを惹きつける快よい楽しい所、ウィルダーニスは静寂な淋しい所、と考えられていた。こうした通念をもとにして、当時の人びとは、この二つの場所を聖書と関連づけて、考える傾向があった。庭園はアダムとイヴが罪を犯す前に暮らしていた楽園と関連づけられ、ウィルダーニスは、楽園を追放された二人が行き着いた荒地と関連づけられていた。しかし、ウィルダーニスは、もっと積極的なプラス思考で考えられていた。なぜなら、キリストがただ一人荒野で、悪魔の誘惑に40日間昼夜耐え抜いたことは、よく知られていた。当時の人びとの多くは、聖書に述べられているこの荒野と、ウィルダーニスを結びつけて考えていた²⁹⁾。

この類似は、ウィルダーニスで冥想する人びとにとって、心の支えとなった。この世の不幸や苦勞を背負っている意識を抱いて、ウィルダーニスで冥想していた人びとが、キリストの苦難に我が身の不幸をダブらせ、またキリスト苦難の荒野と、彼らの修業の場としていたウィルダーニスをダブらせたことは、心理的にも自然な成り行きだったのかも知れない。こうした時代意識を背景にして、ウォーリック伯爵夫人の場合はどうだったのか、もう一度取り上げてみたい。

夫人は1666年7月25日から宗教日記 (devotional diary) を書き始めた。その後殆んど毎日、「私は朝目覚めると、すぐ神に感謝し、それから一人でウィルダーニスに行って冥想した」という言葉が続いている。7月30日の日記には、こう書かれている——「ウィルダーニスで、神はお喜びになって、神との甘美な交わりを私に与えて下さった。私が自分自身の死について、これまでよりもっと想いを向けて、死という大きな変化を迎える、心の準備が出来るようにし

て下さった。お陰で私は爽やかな心で、ウィルダールニスに去った」。

翌1667年5月16日、ロンドンのチェルシーにあったウォリック館で、夫人は大変辛い日を過ごした。この日書かれた彼女の日記に、この辛い想いが書かれている——「今日は3年前息子が亡くなった日。私は朝食を断って、すぐウィルダールニスに引きこもり、一人息子だったわが子の病気と死を、長い間想い続けた」と。

この年の8月、サリー州のベディントン邸宅に行った時、彼女は冥想について、このように書きこんでいる——「午後、私はベディントンを見に出かけた。庭園の奥まった路々を歩いた。そこは私がいつも冥想に耽って歩いた所。私は散策路で過ごした甘美な快よい時間を神に感謝した。そこは、以前、私がたびたび、神との交わりを得られた所だった」³⁰⁾。

ウォリック伯爵夫人の宗教日記の随所に書き留められている体験は、彼女一人だけに止まっている個人的体験ではなかった。当時の貴族階級の人びとや文化人たちの中に、夫人と共通する体験を、庭園やウィルダールニスで得ていた人びとが多くいたからである。

バートンが勧めた、いわゆる「エリザベス時代の陰鬱症状」治療法としての、庭園内の散策は、当時の貴族階級の人びとや知識人たちの間で理解され、これを実行していた人びとがかなりいた。とは言え、庭園内の冥想はまだ限られた一部の人たちの間で行われていた習慣だった。冥想を行う者の真意を測りかねた人びとは、彼（彼女）は不治の心の病いに蝕ばまれた哀れな者と考えていた。このように、冥想して神との交わりを求める者が、哀れな陰鬱症患者と誤解されるような事が、当時は往々あったらしい。たとえ、誤解があったにせよ、神との交わりを求めて冥想に耽る者、またありの儘の心になりたいと散策する者にとって、静寂に満ちた庭園は、最も適わしい隠れ家だった³¹⁾。

※ ※ ※ ※

十七世紀にジョン・オーブリー (John Aubrey) という1人の、伝記作家・古資料収集家があった。イギリス中南西部のウィルトシャー州 (Wiltshire) の資産家の家庭に生まれたオーブリー

ーは、孤独な少年時代を過ごした。その反動のせいか、彼は早くから、広く人との交際を楽しむにしていた。資産家の息子だったから、どの家に遊びに行っても、訪ねた家の人たちは快よく彼を迎え入れて、家の話、土地の昔話を彼に面白く話してくれた。これがきっかけになって、オーブリーは古い土地の古い資料収集に興味を持つようになった。そして、オックスフォードのトリニティー・コレッジ (Trinity College, Oxford) 在学中に考古学を志したが、イギリス内乱のため学業を中断せざるを得なかった。

オーブリーは多くの人たちから話を聞き集め、膨大な古い資料を収集したが、それらを整理分類しない儘だったので、著作に生かすことが出来なかった。彼が生存中出版した唯一の本は、逸話や民話を集めた『雑録集』 (*Miscellanies* 1696) だけだった。

オーブリーは少年時代からの友人だった哲学者のトマス・ホブズ (Thomas Hobbes) 始め、シェークスピア、ベン・ジョンソン (Ben Jonson)、フランシス・ベーコン (Francis Bacon)、ウォルター・ローリー (Walter Raleigh)、ジョン・ミルトン (John Milton)、その他の文化人の伝記を書いた。生前出版されることがなかった、これら伝記の原稿と、その他の地誌研究の原稿をすべて、彼は友人ウッド (Anthony à Wood) に委ねて世を去った。

彼の地誌研究は死後150年して十九世紀後半に、また書きためていた伝記は『短篇伝記集・その他作品選集』 (*Brief Lives and Other Selected Writings* 1949) と題して死後250年して、それぞれ出版された。

オーブリーは生存中文筆家としては認められなかったけれど、考古学者としては大きな成果を収めた。彼は故郷エイヴリー (Avery, Wiltshire) の地に埋まっていた、一群の大きな古代遺跡を1648年に発見し、その後長い間現地調査を続けて、イギリスの考古学研究に大きな貢献をした。その功績を認められて、オーブリーは当時創立されて間もない「イギリス学士院」 (The Royal Society) の会員に推薦された。

このような経歴を持っていたオーブリーは生存中、十七世紀イギリスの各分野にわたる、多くの文化人を知己に持っていた。彼はそうした人物から直接聞いた話、またはその周辺の人たちから聞いた話に基づいて伝記を書きまとめた。彼の幼年時代からの友人だった哲学者ホブズの伝記はこうして書かれた。ところで、ホブズは早い頃、エリザベス女王の高官の一人だった、博識の文化人フランシス・ベーコンの所で、1621-26年の間5年間、ベーコンの助手を勤めていたことがあった。ベーコンは、セント・オールバンズ寺院 (St. Albans Abbey) に隣接する、ゴランベリー (Gorhambury) の地に邸宅を構えていた。庭園愛好家だったベーコンが「庭園について」 ("Of Gardens") というエッセイを書いていることは、よく知られている。彼は、助手のホブズを連れて庭園を散歩中、アイデアが閃くと、即座にそれをホブズに話



10. ローマ野外劇場遺跡のあるベーコンの Gorhambury 邸宅跡（'67年7月8日筆者撮影）。

して書き取らせたそうである。オーブリーは多分友人ホップスから聞いたらしく、彼が書いた「ベーコンの伝記」に、このエピソードが載っている³¹⁾。

オーブリーの伝記に述べられているように、庭園の散歩を好んだベーコンは、「庭園について」の書き出し部分で、こう言っている――

GOD ALMIGHTY first planted a Garden. And indeed it is the purest of human pleasures. It is greatest refreshment to the spirits of man; without which, buildings and palaces are but gross handy-works: and a man shall ever see that when ages grow to civility and elegancy, men come to build stately sooner than to garden finely; as if gardening were the greater perfection. I do hold it, in the royal ordering of gardens, there ought to be gardens for all the months in the year; in which severally things of beauty may be then in season.³²⁾

全能の神はまず最初に庭園を作られた。本当に、庭園は人間が最も純粋な喜びを味わう所である。庭園は人間の精神にとって、最高の憩いの場である。庭園がなければ、さまざまな建造物や宮殿は、手際よく造られた、馬鹿でかい物に過ぎなくなってしまう。時代を重ねて、礼節と優雅

の時代が訪れる時、小じんまりした庭園を造るより、むしろ、壮大な庭園造りに、人びとが励むようになることを、人は知ることだろう、一あたかも、庭園が完璧な技芸の極致であるかのよう
に。幾つかの庭園を豪華に整然と配置しようとする際、1年のすべての月に向いた庭園がなければ
いけない、と私は強く主張したい。庭園にはそれぞれ、季節毎に美しい花々が咲く方がよいからだ。

ここに述べられているように、ベーコンは単に個人的な好みの範囲で、庭園を考えてはいな
かった。庭園が人間の精神によい影響を及ぼすことを、彼はよく理解していた。ベーコンはこ
のエッセイの中で、こうした見地から庭園のあり方を考えて、自然や四季の変化に応じて楽し
めるように、配慮を働かせて庭園を造った方がよい、と以下専門的な造園理論に基く方法を述
べている。そして、庭園がいかに人間の心に豊かな作用を及ぼすか、彼はエリザベス時代の人
びとに、その効用を積極的に知らせよう、と図った人だった。彼の意見には、現在ブームにな
っている園芸愛好家たちに対する、専門家の指導方針と通じるところがあることは興味深い。

ウィリアム・ハーヴィー (William Harvey) は、ベーコンと同時代の医者だった。彼は血液
循環を最初に発見した医学者として有名である。オーブレーは、この人の伝記を書いている。
それによると、ハーヴィーの邸宅はサリー州クーム (Combe, Surrey) にあった。彼は庭園愛
好家だったので、イタリアのルネッサンス庭園に作られていた洞窟を真似て、自分の庭園に洞
窟を作らせ、訪れた友人をその中に招き入れて一緒に座り込み、話し合うのを楽しんだそう
である³³⁾。庭園に洞窟を作ることは、十八世紀に入ると、貴族、富豪、文化人の間で大流行にな
った。この時代の代表的詩人だったポープ (Alexander Pope) が、トウィックナム (Twicken
ham) の彼の庭園に洞窟を作って楽しんだことは、有名なエピソードとして伝わっている。エ
リザベス時代に洞窟を庭園に作り、宗教色のない洞窟の使い方を楽しんだハーヴィーは、十八
世紀になって流行した洞窟の新しい利用法の先駆けとなった人である。

以上述べた人たちの例に見るように、庭園は一人冥想に耽るか、散策するかによって、自分
だけの世界に入って、心の自由を楽しむ場だった。しかし、庭園内に作られた岩屋や洞窟で、
独居を楽しむ人もおれば、あるいは家族や友人との社交を楽しむ人も出たが、心の疲れや傷を
癒して心の健康を回復するという点では、庭園利用の効果は、いずれにも共通していた。

ジョン・イーヴリン (John Evelyn) は、十七世紀のイギリス社会に起こった大小さまざま
な出来事、変化、現象を日記に書き留めていた文筆家だった。彼の日記は最初『ジョン・イー
ヴリン回顧集』 (*The Memoirs of John Evelyn 2 vols*) と題して出版された。それから幾度か改訂
増補版が出た後、1955年に6巻の決定版が出版された。彼の日記は十七世紀イギリスの世相
理解には、不可欠の資料と評価されている。

イーヴリンは現在では日記作家として有名になっているが、彼は当時の傑出した園芸専門家 (horticulturist) だった。園芸に造詣が深かったイーヴリンは、造園全般にわたる大作をまとめようと、十七世紀半ばから資料収集と執筆に取りかかったが、計画が余りにも膨大過ぎたため、書き続けられず途中で執筆を断念せざるを得なくなった。

彼は園芸に関する長年の知識と経験に基づき、庭園はそこで生育する植物によって、物質的に人間を豊にするだけでなく、道徳的、精神的に、特に人間性を豊かにする、と確信してい

た³⁴⁾。

時代は下って十八世紀半ばになると、暗い夜の闇に包まれた墓地や、蔦が生え、鴉が鳴く、崩れかかった中世の建物を背景にして、人間の陰鬱で孤独な想いを詩にうたう、いわゆる「墓畔派」(The Churchyard School) と呼ばれた詩人たちの時代になった。その中でも、エドワード・ヤング (Edward Young) の『生と死と永遠を歎く言葉、または夜の想い』(*The Complaint, or Night Thoughts on Life, Death and Immortality Nine Books* 1742-5) は、この派の先駆となった長編詩である。オックスフォードの大学出身のヤングは、最初は詩と劇を発表して、文学者として成功しようとした。しかし、彼はこの世の栄達を求める空しさに失望して、1730年ハートフォードシャー州のウェリン (Welwyn, Hertfordshire) 教区教会の牧師になった。それから15年後に出版されたこの長編詩には、生と死と永遠の冥想に耽る数々の想いが、脈絡なしにいつまでも詠い続けられてゆく。この詩には、彼の個人的経験が少なからず反映している、と言われている。冥想の形を取って流れてゆくこの詩には、エリザベス時代の貴族たちが、一人耽っていた冥想と、心理的に共通しているようである。

作品から受ける陰鬱な印象とは反対に、ヤングは、自然や人間を肯定する積極的な一面を持っていた。その一例を挙げると、彼は喜びについて、晩年書いた手紙の中で、「庭園にはいつも、賢者の称賛と愛情が注がれていた。人を賢く幸福にするのに必要なものは何であるかと言えば、それは反省と平和だけだ。そしてこの二つとも、庭園から自然に生育してゆくものだ³¹⁾と、述べている。ヤングも、これまで庭園を愛し、敬虔な心で神との交わりを求めて、冥想に耽った人びととおなじような心で、庭園は聖なる領域、教会と全くおなじ祈りの場、エデンの園に相当する所、と信じていた牧師にして詩人だった³⁵⁾。

ヤングの庭園に対する係わり方には、チューダー王朝の時代に、庭園で冥想に耽った人びとと共通する宗教的心情があった。しかし、十八世紀になると、人びとは美学的な立場に立って庭園と係わるようになって来たので、彼らの意識から宗教的な色彩が薄らいでいた、と言われている。こうした時代意識の変化を考えると、ヤングのような人は数少なくなっていたのかも知れない。

ここで、十八世紀初めにいた2流どころの詩人ではあったが、当時の詩壇や一般読者にかなり影響を与えた、トマス・パーネル (Thomas Parnell) を取り上げてみたい。ダブリン生まれのパーネルはダブリン市のトリニティ・コレッジ (Trinity College, Dublin) で学んだ後、国教会牧師になった。彼は1712年ロンドンに出て文筆活動を始めた。彼が『スペクテーター誌』(*The Spectator*) に投稿したエッセイが、たまたま『ガリヴァー旅行記』(*Gulliver's Travels*) の著者スウィフト (Jonathan Swift) の目に留まった。これが縁になって2人は友人になり、ス

ウィフトはパーネルを、彼の知り合いの文士詩人たちに紹介してやった。

パーネルはポープが『イリアッド』(Alexander Pope, *Illiad*) 訳を出版した時、この訳詩の序文エッセイを書いた。これが機縁となって、パーネルはポープと親しくなった。パーネルは生存中詩を書いたいたが、殆んど出版されなかった。彼はアイルランドに戻ってから2年後に、39歳で亡くなった。それから間もなく、ポープは『折り折りの詩』(*Poems on Several Occasions* 1722) と題して、パーネルの殆んどの詩を収めた遺稿詩集を出版した。

パーネルは宗教詩を多く書いているが、宗教詩と心情的に共通する、陰鬱な冥想詩も書いている。その中でも「夜、死を想う一編の詩」は、どこかミルトンの「沈思に耽る人」(*Il Penciloso*) を思わせる詩である。彼の後に出て来た若い詩人たちの間で、パーネルに倣って夜の陰鬱な想いや、わびしい夜の墓地の風景を詩に詠う、いわゆる墓畔派の詩が流行するようになった。ヤングの『夜の想い』、ブレアの『墓』(Robert Blair, *The Grave* 1743)、グレイの『エレジー』(Thomas Gray, *Elegy written in a Country Churchyard* 1750) 等の新進詩人たちの作品によって、十八世紀半ば頃に墓畔派の詩は頂点に達した。こうした流れを見ていたゴールドスミスは、彼が書いた『パーネルの生涯』の中で、パーネルが果たした先駆者的役割を理解して、好意的な評価を示している。

パーネルの宗教詩の中に、「隠者」("The Hermit") という作品がある³⁶⁾。匿名で出版された、道徳的教訓内容のこの詩は、当時人びとの心に訴えたらしく売れ行きがかなりよくて、何度も版を重ねた。売れ行きがよかった原因は道徳的説教のためだけではなくたようである。チューダー王朝時代から貴族社会で伝統になって来たイギリス庭園と隠者の関係が、この詩の最初に叙情豊かに、こう描かれている。

FAR in a wild, unknown to public view,
From youth to age a reverend Hermit grew,
The moss his bed, the cave his humble cell,
His food the fruits, his drink the crystal well,
Remote from man, with God he pass'd his days,
Prayer all his business, all his pleasure praise.³²⁾

II. 1-6.

だれも知らない山奥で、尊とい隠者は
若い頃から暮らし、年老いた。

苔をしとねに、隠者は眠り
岩屋を粗末なすみかとし
草木の実を食べ、澄んだ清水を飲んで、
人里遠い所で、神と一緒に、いつも暮らした。
隠者の務めは、ひたすら祈ること、
楽しみは、神を讃えることだった。

さて、249行に及ぶ、この長い宗教詩はこうして始まる。以下、隠者は庵りを訪れた若者に誘い出されて、二人で旅をしながら、世の中のさまざまな出来事を見、経験をjする。若者は幾度となく、隠者を誘惑に誘い込もうとした。隠者の心は揺れ動いたが踏み止まった。それを見届けて、最後に若者は真の姿を隠者に示した。彼は隠者の信仰の強さを試すため、地上に下りた天使だった。天使は隠者を励まして天に昇り、隠者がもとの庵りに戻って修行を続けることで、この詩は終る。

今から見れば、特に取り柄のないこの作品が十八世紀初めに、隠れたベストセラーになったのは、なぜだろう？当時、イギリス人は社会習慣として、国教会が定めた『祈祷書』(*The Book of Common Prayer*)を日常読み親しんでいた。彼らはこの詩の説教じみた内容にさほど抵抗を感じないで、素直にこの詩を受け入れたのではないだろうか。特に彼らは、詩の最初に描かれている隠者の生活に、心を惹かれたことだろう。人は誰でも、嫌な現実世界を脱け出して、孤独隠遁の自由な世界に入りたいという想いを、多少の差はあれ心の奥底に持っている。隠者は彼らのこうした想いを具体化したイメージになっていた。

内容的に彼らの宗教感情に訴えたこの詩は、十八世紀前半に流行したヒロイック・カプレット (*heroic couplet*) の詩形を使って書かれていたから、当時の人たちには読み易かった。「隠者」が当時広く読まれ、版を重ねて出版された理由として、こうした条件が重なって読者に作用したと思われる。「隠者」の人氣がたとえ一時的だったにせよ、詩のアンソロジーは優れた作品ばかり厳選して、編集されるとは限らない。各時代によく読まれた詩が現代までどのように伝わったのかを示そう、とする趣旨をもって編集されることだってある。リース編『比較的長い名詩選集』(*The Golden Treasury of Longer Poems*)に、「隠者」が十八世紀の有名詩人の作品に混じって入っているのは、編者リースのこうした意図が働いていたからだ、と想像出来る。

「隠者」をエリザベス時代に庭園で冥想に耽った貴族たちとの関連で捉えると、この作品に描かれている隠者は、彼らが心に想い描いていた、中世の隠者を具体化したイメージだった。パーネルと同時代の厳しい現実社会に生きた人にとっても、隠者は40日間荒野で悪魔の誘惑

に耐え抜いたキリストと共通する存在であり、また質素な生活を送り、ひたすら修行に精進していた中世の隠者でもあった。彼らはパーネルの作品の中に、試練に耐えて現実を生き抜く心の支えを見出したのだった。

※ ※ ※ ※

エリザベス時代の貴族の庭園における冥想は、十八世紀になって始まったメソヂストの指導者たちとも、思わぬ形につながっている。ウェスレー兄弟とともに、メソヂストの指導者となったホワイトフィールドはオックスフォードの学生時代に、よくクライスト・チャーチの散策路（Christ Church Walk）を散策した。彼はある夜の体験を日記に、こう記録している。

私は〔荒野で試練に耐えた〕イエス・キリストの例に倣おうと思ったから、夕食後、自ら進んで私たちの大学近くのクライスト・チャーチ散策路に出かけた。木立の中の本の木の下で、2時間近く黙祷を続けた——顔を伏せたり、ひざまずきながら。私の仲間の中の誰かが、増長した思いに完全に取りつかれてしまわないか、とその間ずっと私の心は恐れと心配でいっぱいだった。その夜、嵐が吹き荒れていた。寒さの中で、こんなにいつまでも長くじっとしていたくない、と普通の人なら誰でも感じるような、幾らかのためらいがない訳ではなかったが、大学に戻る合図の鐘が大きく響きわたるまで、私は「最後の審判の日」の恐ろしい思いでいっぱいだった³⁷¹。

ホワイトフィールドはクライスト・チャーチ・コレッジに在学中、おなじ大学にいたウェスレー兄弟（Wesley brothers, John and Charles）が始めていた、熱心なクリスチャン学生グループに加わった。会員の学生たちが厳しい修行を続けたので、このグループは「聖者のクラブ」（“Holy Club”）とか、「規律遵守の信者グループ」（“Methodists”）という皮肉ったあだ名をつけられた。大学卒業後、3人はアメリカに伝道に出かけたが、成果は乏しかった。

イギリスに帰ってから、3人はメソヂスト派の伝道に乗り出した。ヘンリー八世がローマ教会から独立してイギリス国教会（Church of England）を創設して以来、国内の大寺院（minsters, cathedrals and abbeys）や教区教会（parish churches）その他一切の宗教施設はすべて、国教会に所属していた。メソヂスト派は非国教会派だったから締め出されて、これらの宗教施設を利用出来なかった。

ウェスレー兄弟とホワイトフィールドは、1739年からイギリス各地を巡り歩いて、伝道活動を開始した。彼らの教会は青空の下の野原だった。彼らの集會に集まる会衆は、教会から問題にされない、文字が読めない、貧しい労働者や農夫の家族たちだった。彼らに向って、神学者や牧師の堅苦しい言葉を使って説教しても、彼らには判らない。そこでウェスレーたちは、

彼らにも理解出来る、彼らが日常使っている生きた口語を使って、判り易い説教をした³⁸⁾。ロマン派詩人のワーズワス (William Wordsworth) は、1802年出版の『リリカル・バラッド』(Lyrical Ballads) 序文で、詩特有の詩語を否定して、一般の人たちが日常生活の中で使っている、生きた言葉使いを詩作に取り入れることの大切さを説いている。ウェスレーもワーズワスも、表現に口語を取り入れる重要性を認識している点では、おなじだった。共通の時代の気運の中から、宗教と詩の分野で、こうして創造の新しい芽が芽生えて来たことは、興味深い現象である。口語の採用とともに、ウェスレー兄弟、特に弟チャールズが作った讃美歌が、野外集會に集まった会衆の心をつなげる効果を一挙に上げたこと³⁹⁾を、忘れてはならないだろう。

メソヂストの布教活動によって、恵まれない貧しい下層階級の多くの人々は、精神的に救われた。しかし、成果があれば、その反動として、既製宗教の信徒からの嫌がらせや妨害は激しくなった。不屈の意志と頑健な身体に恵まれた兄のジョン・ウェスレーは妨害をものともせず、毎年8,000マイルに及ぶ行程を馬に乗って巡歴して、精力的に伝道続けた。

ジョン・ウェスレーは、約50年間日記を書き続けた日記作家としても有名である。彼が書いた簡単な毎日の日記に、説教前に彼が庭園で冥想し、説教の準備をしていたことがよく書き込まれている。彼がアメリカ滞在中に書いた日記を見ると、1737年3月12日、彼はジョージア州サヴァンナにあるモレイヴィアン教徒のドイツ風庭園 (German Moravian Garden, Savannah, Georgia) で、40分間祈り、冥想し、ギリシャ語聖書を読み、讃美歌を歌って、心を整えている。また2日後には、説教準備のため、庭園で神秘宗教家のトマス・ア・ケンピス (Thomas à Kempis) を読み、冥想している。

ジョン・ウェスレーはイギリスに帰国して、会衆に向けて説教するための巡回伝道を始めてからも、この巡回旅行を利用して、有名な十八世紀の庭園を訪れて、その美しい風景を喜んで観賞し、宗教活動をするための力を養う休らぎの場とした。ウェスレーの場合にも、エリザベス時代以来から伝わって来た、庭園と人との係わりが、このように表われていた。彼が80歳になり、ムーアゲイト (Moorgate) に近いシティ・ロード (City Road) を挟んでバンヒル・フィールド (Bunhill Fields) 非国教墓地と向かい合っているウェスレー教会に住んでいた頃、彼は1783年6月6日の日記に、こう書き込んでいる――

「午前8時、庭園で冥想、庭園と語らいを交わす」⁴⁰⁾。

注

1) Thacker, Christopher, *The History of Gardens*, PP. 98-101.

- 2) *Ibid.*, P. 96.
- 3) *Ibid.*, PP. 95–96.
- 4) *Ibid.*, PP. 147–161.
- 5) Coffin, David R., *The English Garden*, P. 2.
- 6) *Ibid.*, PP.1–2.
- 7) Strong, Roy, *The Renaissance Garden in England*, PP. 23–43.
- 8) *Ibid.*, PP.50-51.
- 9) Mountfield, David, *Costles and Castle Towns of Great Britain*, P. 82.
- 10) Coffin, PP. 1–3.
- 11) *Ibid.*, P. 87.
- 12) Strong, P. 51.
- 13) Coffin, PP. 87–91.
- 14) *Ibid.*, P. 60.
- 15) Ditchfield, P. H., *The Manor Houses of England*, cf. Chapter III The Evolution of the Manor-House and Chapter VIII Gardens and Surroundings.
- 16) Lasdan, Susan, *The English Park*, PP. 5–20.
- 17) Thacker, PP. 81–93.
- 18) Lasdun, Susan, PP. 5–20.
- 19) Gies, Joseph and Frances, *Life in a Medieval Castle*, Chapter III The Castle as a House (PP. 57–74.)
- 20) Trevelyan, George Macaulay, *English Sotial History*, PP. 307–308. Sackville-West, Vita, *English Country House*, P. 29. によると、マノア・ハウスが盛んに作られた時期は 1500–1650 年。
- 21) Brown, R. Allen, *English Castles*, Chapter 5 Decline (PP. 128–153.) Gies, XII The Decline of the Castle (PP. 218–224.)
- 22) Coffin, P. 83.
- 23) *Ibid.*, PP. 71–72.
- 24) Hodge, Edmund W., *Enjoying the Lakes*, P. 16ff.
- 25) Coffin, P. 86.
- 26) *Ibid.*, P. 72.
- 27) *Ibid.*, P. 72.
- 28) *Ibid.*, P. 73. Sackville-West, *Knole and the Sackvilles*, P. 116.
- 29) Coffinm, P. 84.
- 30) *Ibid.*, PP. 63–65.
- 31) *Ibid.*, P. 61.
- 32) Vickers, Brian ed., *Francis Bacon*, P. 430.
- 33) Coffin, P. 61.
- 34) *Ibid.*, P. 63.
- 35) *Ibid.*, P. 69.
- 36) Rhys, Ernest, “Hermit”, *The Golden Treasury of Longer Poems*, PP. 103–108.
- 37) Coffin, PP. 69–70.
- 38) Plumb, J. H., *England in the Eighteenth Century*, PP. 89–97.
- 39) Lawton, George, *John Wesley’s English*, 3. The Vocabulary of Narrative (PP. 36–58.), 5. Choice of Words:

Wesley's Theory and Practice (PP. 90–99.), 9. The Eloquence of Familiar Speech (PP. 191–217.)
40) Coffin, PP. 70–71.

参考文献

- Airs, Malcolm, *The Tudor & Jacobean Country House: A Building History*, Alan Sutton Publishing Ltd., Gloucestershire, Y. K. 1995.
- Bickers, Brian ed., *Francis Bacon*, Oxford University Press, Oxford and New York 1996.
- Brown, R. Allen, *English Castles*, Book Club Associates, London 1977.
- Coffin, David, *The English Garden: Meditation and Memorial*, Princeton University Press, Princeton, New Jersey, USA and Chichester, West Sussex U. K. 1994.
- Ditchfield, P. H., *The Manor Houses of England*, Senate, London 1994.
- Gies, Joseph and Frances, *Life in a Medieval Castle*, Harper and Row, Publishers, New York 1974.
- Hodge, Edmund W., *Enjoying the Lakes*, Oliver and Boyd, Edinburgh and London 1957.
- Hunt, John Dixon, *Gardens and Picturesque*, M T Press, Cambridge, Massachusetts, USA and London, U. K. 1992.
- Jackson-Stops, Gervase; Schochet, Gordon J.; Orlin, Lena Cowen and MacDougall, Elizabeth Blair ed., *The Fashioning and Functioning of the British Country House*, National Gallery of Art, Washington 1989.
- Kelsall, Malcolm, *The Great Good Place: The Country House & English Literature*, Columbia University Press, New York 1993.
- Lawson, George, *John Wesley's English*, George Allen & Unwin, London 1962.
- Lasdan, Susan, *The English Park; Royal, Private & Public*, Vendome Press, New York 1991.
- Mountfield, David, *Castles and Castle Towns of Great Britain*, Smithmark Publishers, Inc., New York 1995.
- Plumb, J. H., *England in the Eighteenth Century*, Penguin Books Ltd., Hommondwork, Middlesex 1951.
- Rhys, Ernest ed., *The Golden Treasury of Longer Poems*, Dent, London 1983.
- Sarkvilles-West, Vita, *English Country House*, Prion Books Ltd., London 1996.
- , *Knole and the Sackvilles*, Tonbridge, Kent 1958.
- Strong, Roy, *The Renaissance Garden in England*, Thames and Hudson Ltd., London 1998.
- Thacker, Christopher, *The History of Gardens*, University of California Press, Berkeley and Los Angeles, California 1992.
- Trevelyan, George Macaulay, *English Social History*, Longmans, Green and Co. Ltd., London 1948.
- Vercelloni, Virgilio, *European Gardens*, Rizzoli International Publications, New York, USA 1990.

使用した辞書と事典

- Klaus, Forster ed., *A Pronouncing Dictionary of English Place-Names including Standard, Local and Archaic Variants*, Routledge & Kegan Paul, London 1981.
- Mills, A. D. ed., *A Dictionary of English Place-Names*, Oxford University Press, Oxford, U. K. and New York, USA

1991.

Stapleton, Michael ed., *The Cambridge Guide to English Literature*, Cambridge University Press, Cambridge, U. K. and New York, USA 1983.

Watson, O. C. ed., *Longmans English Larousse*, Longmans, Green and Coltd, Harrow and London 1968.

図 版

1. **ヴェルサイユ庭園内の噴水劇場 (Le Théâtre d' Eau)**. 円形劇場のまわり一面に、柱のように高く水を噴き上げる噴水の列が作られている。舞台の背景の飾りになっている、一定の間隔をおいて深く深くくりぬかれた緑の壁が、噴水をかこんで並んでいる。この劇場の中心になっている広場では、宴会、劇上演、コンサート、優雅なバレエ、詩の朗読、文化人や学者の易しい講演などの催しが行われた。ここはまた、庭園内を散策する人たちが落ち合う場所にもなっていた。
図版には、恋する騎士に逢おうと胸をときめかして、召使いが引くセダンの乗物に乗って、ここに集まって来る名家の貴婦人たちが描かれている。
2. **Kenilworth Castle**. A. 城壁の窓越しに見える庭園。 B. 城の外構えの城壁と周辺の展望。
3. **Burghley House**.
4. **Theobalds**.
5. **The Titlepage of Robert Burton's *Anatomy of Melancholy***. ギリシャの哲学者デモクリタス (Democritus of Abdera) が、図面の背景になっている人工庭園 (formal garden) を脱け出して、緑林の木陰の休らぎを見出している。人生の煩わしさに陰鬱になって、自然の中に心の休らぎを求める人びとを、この図面は暗示している。
6. **Rushton Hall (Manor House), Northamptonshire**.
7. **The Square, Enclosed Garden**.
8. **The Wilderness**. この図版を見ると、ウィルダーニスと迷路 (maze) がよく似ていることが判る。
9. **A Melancholy Young Man**. 背景になっている人工庭園の外側にある緑林に、心の休らぎを求めて訪れた憂鬱症に悩む若い騎士。絵のテーマは、緑林に心の平和を求めて来たデモクリタス (図版5) と共通している。ここに描かれている若い騎士は、「エリザベス時代の慢性鬱病」(“Elizabethan Malady”) 患者になった、貴族階級の人びとを象徴している。
10. ゴーランベリー (Gorhambury) にあったベーコンの邸跡。現在は町の公園になっている。
11. **Alexander Pope's Villa at Twickenham** 十八世紀前半のイギリス詩壇の代表的詩人だったポーブは、ホーマーの叙事詩『イリアッド』と『オデッセイ』(Homer's *Iliad and Odyssey*) をヒロイック・カブレットを使って英訳した。ポーブは売れ行きがよかったこの訳詩の収益を投じて、テムズ河畔のトウィックナム地区に土地を買って、イタリア風の邸宅 (country house) を作り、この家に最後まで住んでいた。
12. **Pope in his Grotto drawn by William Kent** ポーブはトウィックナムの地に作った彼の邸宅の庭園内に、イタリアの庭園内にある岩屋 (grotto) にまねて岩屋を作り、その中で詩作に時を過ごすことを好んだ。ポーブとおなじ十八世紀前半に活躍した造園の巨匠ウィリアム・ケントにより、この絵は描かれている。